

目的:江戸後期儒学者 頼^{ライ}山陽の父 春水^{シュンスイ}および母 梅^{ハクイ}颯が記し残した日記および頼家にまつわる文書から年中行事を取り上げ、特に重点的に記されていた家祭に関する事項をまとめることを目的とした。

方法:『春水日記』(1781(天明元)年12月16日~1816(文化12)年12月2日)、『梅颯日記』(1785(天明5)年5月13日~1832(天保3)年12月晦日)および頼家にまつわる文書を資料とした(いずれも、お茶の水女子大学女性文化資料館蔵)。当時頼家で祭られていた祖(始祖~4代)、その妻らおよび遠祖(2名)の合計10名について、両日記より各人の忌日に記された事柄を抜き出し、記載状況および記載の頻度を検討した。さらに、残されていた1804~1805年(文化元~2年)の家祭献立の記録を調査し、献立の形および利用されていた食品を検討した。

結果:『春水日記』は、春水が広島藩儒員として江戸藩邸への出仕と広島への帰藩を1~2年おきに繰り返した際の勤めに関する記述が中心であり、家祭忌日の様子の記載はほとんど見られなかった。一方、『梅颯日記』には年に合計10回行われる家祭について、日記の記されているおよそ42年間(缺筆および缺本を除く)のうち平均68%の割合で家祭を執り行ったことが明記されており、遠祖を除く8回について調べるとその割合はさらに増加した。1804~1805年の資料を分析した結果、家祭に供された献立は遠祖以外では決まった形をとっており、猪口、御汁、平、御飯、御香物、御向浩、御酒、御肴、御菓子、御茶であった。遠祖に関しては‘子孫無き為当家で祭る’と記されており、猪口と御向浩が省略されたやや簡略な献立であった。各皿に用いられる平均食品数は猪口2、御汁2、平3という結果で、いずれの場合も野菜が半数を占め、その中の幾つかの野菜は自家製のものをを用いた記録が認められた。